

串間市教育研究所

I	研究主題	3-2-1
II	主題設定の理由	3-2-1
III	研究の目標	3-2-1
IV	研究の仮説	3-2-2
V	研究の内容	3-2-2
VI	研究の実際	3-2-2
1	kushima版アクティブ・ラーニングについての研究	3-2-2
(1)	kushima版アクティブ・ラーニングの考え方	3-2-2
(2)	kushima版アクティブ・ラーニングに向かう課題づくり	3-2-3
(3)	「kushima版アクティブ・ラーニングのススメ」の作成と活用	3-2-3
(4)	ラーニング・スキルの指導	3-2-4
(5)	kushima版アクティブ・ラーニングの検証授業	3-2-4
2	学力調査等の結果分析に基づいた学習活動を取り入れた 授業づくり及び評価問題の実施についての研究	3-2-5
(1)	本市の学力調査等の結果及びB問題の傾向	3-2-5
(2)	評価問題の作成と実施	3-2-6
(3)	評価問題とリンクした授業づくりのポイント	3-2-7
(4)	学力調査等の結果分析に基づいた学習活動を取り入れた 授業づくりの検証授業	3-2-8
(5)	評価問題実施による授業改善と児童の変容	3-2-9
VII	研究の成果と今後の課題	3-2-10
○	研究同人		

I 研究主題

児童生徒一人一人に確かな学力を身に付けさせる学習指導
～kushima 版アクティブ・ラーニングと学力調査等の結果分析に基づく授業づくりを通して～

II 主題設定の理由

平成 29 年 3 月に新学習指導要領が公示された。今回の改訂の基本的な考え方として、「知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視する現行学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成すること」が挙げられている。その中で、知識の理解の質を高め、資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」を重視し、知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の 3 つの柱で再整理されている。

また、我が国のこれまでの教育実践の蓄積に基づく授業改善の活性化により、子供たちの知識の理解の質の向上を図り、これからの時代に求められる資質・能力を育てていくことが重要であるとし、「小・中学校においては、これまでと全く異なる指導方法を導入しなければならないと浮足立つ必要はなく、これまでの教育実践の蓄積を若手教員にもしっかりと引き継ぎつつ、授業を工夫・改善する必要がある。」と示されている。このことから、確かな学力を育成するための「主体的・対話的で深い学び」やこれを実現する授業の工夫・改善の重要性を改めて読み取ることができる。

本市では、平成 29 年度教育施策において、学力向上の推進の柱に、「子どもたちの発達段階に応じた各種学力検査や知能検査を実施し、児童生徒の学習状況等の分析を行い、一人一人の児童生徒に確かな学力を身につけさせるための指導の充実を図る。」「児童生徒に基礎的・基本的な学習内容を確実に定着させるため、少人数授業の実施など指導体制や指導方法の工夫改善（主体的・対話的で深い学び）等を通して、『わかる授業』で基礎学力の向上を図る。」ことを掲げている。

これに関連し、本研究所では昨年度まで、児童生徒が主体的に学び、自ら考え、自ら問題を解決していくことを通して、確かな力を身に付けさせるために「kushima 版アクティブ・ラーニング」について研究を行ってきた。また、みやざき学力調査に着目した学力アッププログラムを構築し、研究所で作成した練習問題を各学校で取り組むことで学力向上を目指してきた。研究の成果として、kushima 版アクティブ・ラーニングの理論と方法が明確になり、その実践が各校でなされるようになってきたこと、学力アッププログラムのトレーニングの効果として数値的なアップが見られたことが挙げられる。一方で、kushima 版アクティブ・ラーニングがまだ市内に十分浸透していない、教科目標の達成とアクティブ・ラーニングの実現が曖昧になっている、数値的な学力アップが限定的であったことなどの課題も残った。

そこで、新学習指導要領の方向性と昨年度の研究所の課題を踏まえ、本年度の研究主題を「児童生徒一人一人に確かな学力を身に付けさせる学習指導」、副題に「kushima 版アクティブ・ラーニングと学力調査等の結果分析に基づく授業づくりを通して」を設定した。児童生徒一人一人に確かな学力を身に付けさせていくためには、「主体的・対話的で深い学び」を日々の授業で実践していくことが欠かせない。この「主体的・対話的で深い学び」を実現していく学習方法が kushima 版アクティブ・ラーニングである。この kushima 版アクティブ・ラーニングは単に主体的で能動的な学習活動にとどまらず、対話的で深い学びを伴うものである。また、学力調査等の結果分析に基づく授業づくりを行っていくことは、今求められている学力を児童生徒に身に付けさせていくことにつながる。よって、本研究を進めていくことは、児童生徒に知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力を養い、一人一人に確かな学力を身に付けさせることにつながり、ひいては串間市の学力向上の推進に寄与するものであると考える。

III 研究の目標

- 児童生徒の確かな学力の育成のための kushima 版アクティブ・ラーニングの在り方を究明する。
- 児童生徒の学力向上と教職員の指導力向上に向けて、学力調査等の結果分析に基づいた授業づくりの在り方を究明する。

IV 研究仮説

- 学習指導において、主体的・対話的で深い学びのある kushima 版アクティブ・ラーニングを実践していけば、児童生徒一人一人に確かな学力を身に付けさせることができるであろう。
- 学習指導において、学力調査等の結果分析に基づいた授業づくりを行い実践していけば、児童生徒一人一人に確かな学力を身に付けさせることができるであろう。

V 研究内容

- (1) kushima 版アクティブ・ラーニング
 - kushima 版アクティブ・ラーニングの考え方
 - ラーニング・スキルの指導
- (2) 学力調査等の結果分析に基づく授業づくり
 - みやざき学力調査の結果分析
 - 結果分析に基づいた授業における学習活動
- (3) 授業研究
 - 研究内容を検証するための指導案形式
 - kushima 版アクティブ・ラーニングの検証授業
 - 学力調査等の結果分析に基づいた学習活動を取り入れた授業の検証授業
- (4) 調査研究
 - 研究成果の検証と授業改善のための評価問題づくり
 - 評価問題の実施と結果分析

VI 研究の実際

1 kushima 版アクティブ・ラーニングについての研究

(1) kushima 版アクティブ・ラーニングの考え方

新学習指導要領公示前に、アクティブ・ラーニングに置き換えた形で、「主体的・対話的で深い学び」を重視していくことが打ち出された。これは、これまでの主体的で協働的に学習していくことだけでなく、深い学びを実現していくことが求められていることを意味している。話し合い活動が活発に行われ、児童生徒に確かな理解があり、深い学びが実現できていなければ、学習目標の達成がなされたことにならない。つまり、「主体的・対話的で深い学び」のあるアクティブ・ラーニングでなければならないのである。

そこで、本研究所においては、昨年度までの kushima 版アクティブ・ラーニングを見直し、次のように定義することにした。

【kushima 版アクティブ・ラーニングとは】

児童生徒が学習問題や課題に対して、主体的・対話的に問題解決し、深い学びを伴いながら学習していくこと

「主体的・対話的で深い学び」は、3つの要素を含んでいる。本研究では、それぞれ「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を次のように整理した。

3つの学び	児童生徒の学びの姿
主体的な学び	<ul style="list-style-type: none">○ 学ぶことに興味や関心をもち、見通しをもって粘り強く取り組んでいる。○ 自らの学習をまとめ、学習活動を振り返って、次の学習に意欲をもっている。
対話的な学び	<ul style="list-style-type: none">○ 子供同士の対話、教職員や地域の人との対話、本の作者等の考え方を手掛かりに考えることなどを通して、相手の思いや考えなどを理解し、新たな考え方等に気付いている。○ 意見交換したり議論したりすることで、あらかじめ個人で考えたことを伝え合い、共有しようとしている。
深い学び	<ul style="list-style-type: none">○ 対話等の内容や情報を基に問題を解決したり、自分の考えを深め広げたり、目的に応じてまとめたりしている。○ 問題解決の過程において、習得した知識や技能をより深く理解したり、知識等に関連付けて活用し問題を解決したりしている。

これらの3つの学びのある学習を kushima 版アクティブ・ラーニングと呼ぶ。

(2) kushima 版アクティブ・ラーニングに向かう課題づくり

今年度、kushima 版アクティブ・ラーニングの定義を見直し、「主体的・対話的で深い学び」としたことで、これまで以上に、学習内容や学習の課題が重要になってくると考えられる。そこで、kushima 版アクティブ・ラーニングを取り入れる場合の課題の要件を次のように整理してみた。

【kushima 版アクティブ・ラーニングを取り入れる学習場面の課題の要件】

- **主体的に解決する意欲をもつことができる課題**
児童生徒が興味関心をもち、進んで解決してみようという意欲をもつことができるような課題
- **対話によって解決する必要がある課題**
対話によって解決できそうな課題や他者に相談したくなるような課題
- **深く考え、自ら解決したくなる課題**
すぐに答えが出たり、考えなくても答えが出たりする課題でなく、ある程度深く考える必要性のある課題。
- **解決の必然性のある課題**
児童生徒からの問いや疑問から生まれた課題であり、解決の必然性をもたせることができる課題
- **解決の見通しのもてる課題**
児童生徒の主体的な学習や対話的な学習によって、解決できそうな課題や解決への見通しがもてる課題
- **多様な考え方や新しい考え方の生じることが想定できる課題**
一問一答や一つの正解に終わらず、児童生徒の多様な考え方や対話などから新しい考え方が生じることが想定できる課題
- **本時の目標の達成に適した課題**
kushima 版アクティブ・ラーニングを成立させるための課題でなく、本時の目標を達成させるのに適した課題
- **児童生徒の実態に応じた課題**
児童生徒が全員学習に参加することができ、共に考えていくことができる課題、児童生徒の学習経験やレディネス等に応じた課題

(3) 「kushima 版アクティブ・ラーニングのススメ」の作成と活用

アクティブ・ラーニングは学習の一手法であり、画一的な学習方法を広めていくことは研究の方向性として好ましいことではない。しかし、児童生徒の学習の姿や授業の進め方が、教師や児童生徒にイメージできないのでは授業としての実践は難しい。アクティブ・ラーニングとはどのような学習を行っていくものであるかある程度具体的に示す必要がある。

そこで、「kushima 版アクティブ・ラーニングのススメ」を作成し活用を図ることにした。この資料は、kushima 版アクティブ・ラーニングの「主体的な学び、対話的な学び、深い学び」の3つの学びの姿を児童生徒にも分かるように例示したものである。kushima 版アクティブ・ラーニングの授業づくりにおいて、教師が学習活動を考えていく上で有効であるとともに、児童生徒も学習の仕方がイメージしやすくなったと考える。資料の活用を図ったことで、アクティブ・ラーニングという言葉も児童生徒に浸透してきている。

【kushima 版アクティブ・ラーニングのススメ】

小学校4～6年生

くしまはん
中間版アクティブ・ラーニングのススメ

 「中間版アクティブ・ラーニング」は、串間市の学校で進められている学習の仕方です。中間版アクティブ・ラーニングで学習してみましょう。

1 主体的に学習しましょう。

- 解決方法や答えの見通しをもって学習します。
- 自分なりの考えをしっかりとちます。
- 進んで問題に取り組んだり解決したりします。
- 最後までねばり強く取り組みます。
- 学習をふり返って、学習をまとめます。



2 対話しながら学習しましょう。

- いろいろな対話（話し合い）をしながら学習します。
- 個人で考えたことを伝え合います。
- 友達の意見をしっかりと受け止めながら聞き、意見交換したり、考えを共有したりします。
- 対話を通して、新しい考え方やちがう考え方に気がきます。



3 学習したことを活用したりまとめたりして、深い学びにしましょう。

- 学習したことを活用して、問題を解決します。
- 友達の考えや資料などを使って、問題を考えたり、自分の考えをまとめたりします。
- 学習して新しく分かったことやよく分かったことを、書いたり話したりします。



※ いつもアクティブ・ラーニングの学習だけではありません。

(4) ラーニング・スキルの指導

アクティブ・ラーニングを推進していく上で、基本的な学習技能の定着は不可欠である。本研究所でも昨年度まで基本的な学習技能を「ラーニング・スキル」として研究してきた。今年度は昨年度の反省を生かし、ラーニング・スキルの指導を細分化し、教師がどのような指導や支援を行っていけばよいかをまとめた。これにより、児童生徒に身に付けさせたいラーニング・スキルの指導を効果的に進められるようにした。

【ラーニング・スキルの指導表の一部】

段階	ラーニング・スキル	教師の指導及び支援
問題提示	① 問題やめあてをすばやく書き写すことができる。 ② 問題や教科書の文章を正確に読むことができる。	<ul style="list-style-type: none"> 教師と同じ速さで書くように指示する。すばやく書き終えた子を賞賛する。書き終えたことを確認する。 全員で読んだり、一人一人に読ませたりしながら確認する。日々の授業で習慣化する。
個人思考	③ 学習問題、めあてに沿って、自分の考えを書き表すことができる。 【一人調べのスキル例】 ○ 問題について、自分なりの答えを書き表す。 ○ 問題に沿って、自分なりの考えでサイドラインを引く。 ○ 自分なりの考えを書き込んだり書き足したりする。 ○ 考えを説明する文を2～3文で書き表す。 ○ 考えたことを図や絵に表す。	<ul style="list-style-type: none"> 考えを書き表す時間をある程度確保する。 必ず、自分なりの考えを表すことを学習の約束としておく。 書けない児童には問答をしながら言ったことを書き表すようにする。 自分なりの考えを書けたことを大いに賞賛する。(丸を付けてもよい。)

(5) kushima 版アクティブ・ラーニングの検証授業

ア 第1学年国語科「サラダでげんき」

イ 学習指導過程及び授業の実際

段階	学習活動及び学習内容	○は、教師の支援 ※は評価 □は、アクティブ・ラーニングの手立て
つかむ (5分)	1 前時の学習を振り返る。 ・ 馬と白くまの場面 2 本時の場面を確認し、めあてを設定する。 アフリカぞうがおしえてくれたことをまとめよう。	○ 掲示資料により、前時を振り返らせ学習内容を想起させる。 主 本時の最後にアフリカぞうが教えてくれたことをまとめるといことを確認し、学習の見通しをもたせる。
見通す (5分)	3 学習の進め方について確認する。 	主 アフリカぞうが教えてくれたことをまとめるために、一人調べをしたり、ペアや全体で話し合いをしたりすることを伝え、主体的な学習を促す。 板書に学習の進め方を視覚的に示すことで、児童は何をするのかが分かっていた。短い時間で学習の見通しをもつことができ、意欲的に一人調べに進んでいた。
	4 調べる観点に沿って調べる。 (1) 学習範囲を音読する。 (2) 一人調べをする。 ・ 登場の様子	○ 机間指導を行い、サイドラインなどが引けているか確認する。引けていない児童へは個

調べる (22分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ すすめた材料 など <p>(3) 調べたことを確かめる。</p> <p>5 調べたことを基に話し合う。</p> <p>(1) ペアで話し合う。</p>  <p>(2) 全体で話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ぞうが教えにきたこと 	<p>別に指導し修正させる。</p> <p>○ 印を付けた所を発表させることで、ぞうのしたことなどを確認させる。</p> <p>対 はじめにペアで、次に全体で自分の考えを発表させる。発表するときの約束を確認し、考えを共有したり、違いに気付いたりできるようにする。</p> <p>自分の考えを伝えた後、友達の考えをしっかり聞いていた。全体で発表する時は、自分と友達の考えを述べていた。</p> <p>○ 児童の発表を黒板に書いておくことで、本時のまとめにつながるようにする。</p>
まとめる (10分)	<p>6 アフリカぞうが教えてくれたことをまとめる。</p> 	<p>深 板書を手がかりに、アフリカぞうが教えてくれたことを一人一人ワークシートにまとめさせる。</p> <p>今日の学習をワークシートに沿って自分でまとめた。板書を参考にまとめていった。</p> <p>※ ぞうが教えてくれたことについて、大事なことを落とさずにワークシートにまとめることができたか。(ワークシート)</p>
振り返る (3分)	<p>7 学習したことや学び方について振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ぞうが教えてくれたこと ・ まとめたこと 	<p>主 本時の学習を称賛するとともに、次時の予告を行い、学習意欲を高める。</p>

ウ 授業の成果と課題

- 主体的な学びを実現するために、学習の流れを視覚的に提示することや学習の流れを繰り返し指導することが学習の見通しをもたせる上で効果的であった。
- 対話的な学びを実現するために、ペアでの話し合いから全体での話し合いという活動は有効であった。特に、話し合うことが明確であったこと、友達の考えをよく聞くことの指導が対話を成立させるために大切であることが分かった。
- 音読、サイドラインを引く、自分の考えを伝える、友達の考えを聞くなどのラーニング・スキルがとてもよく身に付いていた。また、進んで発表する態度や最後まで集中して学習する様子も見られ、アクティブ・ラーニングを進める上でラーニング・スキルを身に付けさせていくことの重要性が再認識された。

児童の授業評価の結果からは、ほとんどの児童が各項目で「とてもよくできた」と評価しており、主体的な学びができていたと思われる。また、「自分の意見が言えてよかった」「友達が相手の顔を見て発表した」などの意見が多数挙がっており、対話等に意欲的に取り組んでいたことがうかがえる。

- 深い学びにしていくために、自分の考えを再構成させる場面はあったが、何をどのようにまとめさせるかを明確にしたり、形式を工夫したりする必要があった。

2 学力調査等の結果分析に基づいた学習活動を取り入れた授業づくり及び評価問題の実施についての研究

(1) 本市の学力調査等の結果及びB問題の傾向

ア 全体的な結果 (小学校)

- A問題 (主として知識に関する問題) については、県平均と同等の正答率を修めている。約半数の学校が県平均正答率を上回っている。
- B問題 (主として活用に関する問題) については、県平均の正答率を下回っている。県平均を上回っている学校数が2～3校である。B問題について課題があると言える。

評価問題は、国語科と算数科で全国学力調査等のB問題を参考に作成した。問題の内容と実施の手順等は以下の通りである。

問題内容	実施時期及び手順
国語Ⅰ 風切るつばさ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1学期の学習内容、9月を目処に実施。 ○ 研究員所属の学校の6年生児童を対象として実施。 ○ 研究員が採点、分析結果を6年担任に伝えるとともに、授業づくりについて研究所の立場から助言する。
算数Ⅰ 円の面積	
国語Ⅱ 海の命	<ul style="list-style-type: none"> ○ 2学期の学習内容、単元が終わり次第実施。 ○ 実施後の結果分析の結果や児童の変容等については、研究員から学校及び6年担任へ伝える。
算数Ⅱ 速さ	
算数Ⅲ 比例	

(3) 評価問題とリンクした授業づくりのポイント

評価問題の実施と併せて、授業づくりのポイントをまとめて、これに沿って授業実践を進めていくことにした。授業づくりのポイントは、検証授業において授業に取り入れて実践を行った。

ア 国語（文学的文章の解釈に関すること）

	授業づくりのポイント	取り入れたい学習活動	アクティブラーニングの視点
1	文章を読んで考えたことを話し合うこと	<ul style="list-style-type: none"> ○ 場面の中心や主題等について、文章に書いて意見を交換する。 ○ 友達の感想などとの相違点などを考え発表し合う。また、友達の考えを踏まえたうえで、自分の考えを述べる。 	○対話的な学び
2	文章を読んで心情等をとらえること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 人物の行動や情景の描写から人物の心情を考えたり、想像したりする。 ○ 人物相互の関係を図などで表す。 ○ 人物の心情の変化をまとめる。 	○深い学び
3	叙述や描写に沿って、自分で考えたことを書き表すこと	<ul style="list-style-type: none"> ○ 叙述を基に感じ取れる事柄を書き表す。 ○ 優れた描写について感想や解説を書きまとめる。 ○ 表現の効果等について考えたり、意味を考えたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○主体的な学び ○深い学び

イ 算数

	授業づくりのポイント	取り入れたい学習活動	アクティブラーニングの視点
1	これまでの学習や生活経験を想起すること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 既習の公式や定義などを確かめる。 ○ 問題を日常生活の事象と結びつけて考える。 	○主体的な学び
2	問題解決に必要な情報を正確に読み取ること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 問題を読んだり書いたり、尋ねていることを確かめたりする。 ○ 問題の内容を絵や図に表したり、問題の意味を友達と説明し合ったりする。 	○対話的な学び
3	対話を通して、多様な考えに触れ、考えを高めること	<ul style="list-style-type: none"> ○ ペアやグループで話し合いを行い、互いの考えを交流する。 ○ 話し合いの中で、新しい考えや異なる考えに気付き発表し合う。 ○ めあてに沿って、よりよい考え方を求めて意見を述べ合う。 	○対話的な学び
4	数学的な用語を使って説明したり、筋道を立てて説明したりすること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 数学的な言葉や定義を用いて、説明を書いたり、発表したりする。 ○ 考え方を筋道を立てて説明したり、正答や誤答の理由を説明したりする。 	○深い学び
5	学習したことを確かめたり生かしたりすること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 解決した問題の解き方を使って練習問題を考えたり、解いたりする。 ○ 様々な既習事項を使って、活用問題を考えたり解いたりする。 ○ 学習して新しく分かったことや納得したことなどを発表し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○主体的な学び ○深い学び

(4) 学力調査等の結果分析に基づいた学習活動を取り入れた授業づくりの検証授業

ア 第6学年算数科「変わり方を調べて」

イ 学習指導過程及び授業の実際

段階	学習活動及び学習内容 ※太字は、学力調査分析から取り入れた学習活動	○は、教師の支援 □は、アクティブ・ラーニングの手立て
つかむ (5分)	1 本時の学習問題を知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">かなたさんが家を出てから14分たったとき、お兄さんが、自転車でかなたさんのあとを追いかけてきました。かなたさんの速さは分速60m、お兄さんの速さは分速200mです。お兄さんは、何分後にかなたさんに追いつきますか。</div>	
	2 問題文を読み、図や絵を使って、問題の意味を理解する。	○ 情報を整理し解決の見通しをもたせるために、黒板の図を用いて児童に説明させる。
見通す (5分)	3 前時の学習を振り返り、問題解決の見通しを立てる。 ・ 前時の内容と相違点	主 前時の学習を想起させ、本時との違いを考えさせることで、解決の見通しをもたせ、主体的な学習の意欲をもたせる。
	4 学習課題を設定する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">変わり方を調べて、問題のよりよい解き方を考えよう。</div>	
調べる (8分)	5 表を書いて問題を解決する。 ・ 全体で数値を記入 ・ 個人で数値の記入 ・ 表の数値と答の確認	○ 問題の図と対応させながら、0分後から3分後までの数値を記入させることで、数値の意味を理解させる。差が0になった時の時間を求めることを押さえる。 ○ 計算間違いをしている児童へは、個別に指導し正確な値を記入させる。
	6 表の結果からよりよい解き方を考える。 (1) 個人で考える。 (2) ペアで考える。  (3) 全体で話し合う。 ・ $840 \div 140 = 6$ ・ まとめ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">2人の距離と1分間にどれだけ縮まったかを使って式を立てる。</div>	○ 表からきまりを見付けたり、式に表したりして解決していくことを個別指導する。 対 自分の考えを伝え合うために、ペアで話し合わせる。ペアで考えたことを全体で話し合い、よりよい考え方に気付かせるようにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">分かったところまでをお互い出し合って解決しようとしていた。ペアによる対話で140mずつ縮まっていくことを使って解くことに気付いた児童が多く見られた。</div> ○ 児童の意見から1分間に140m縮まったことを押さえて、まとめにつなげる。
話し合う (12分)	7 練習問題を解く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">「お兄さんが追いかけて始めたのが、21分後だったとすると、お兄さんは何分後にかなたさんに追いつきますか。」という問題に対して、つばきさんは、3分後までの表を書き、答えが9分後と答えました。どうして9分後としたのか理由を書きましょう。</div> ・ $60 \times 21 = 1260$ $1260 \div 140 = 9$ 9分後 	○ 3分後までの表を提示し、表を見て答を出したという題意を理解させる。 深 既習の140mずつ縮まっていくということを生かして問題解決ができるように個別指導する。 早く解決できた児童には、3分後に2人の差が840mになったことに着目させて別解も考えさせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">1260が2人の差、140mずつ縮まることを言葉も書き加えて説明していた。</div>
	8 本時学習を振り返る。 ・ 学習内容と学習の仕方について	深 本時学習について振り返り、対話や話し合いから気付いたことや、自分がよく理解できたことなどを発表させる。
振り返る (3分)		

ウ 授業の成果と課題

- 問題の把握の場面で、情報を正確につかみ整理させるために、図を使って問題の意味を児童に説明させた。問題の場面が視覚的にイメージでき主体的に解決していく意欲をもたせることができた。
- 難しい問題であったが、ペアで対話することで解決のヒントを得たり、問題解決ができたりする児童が多く見られた。対話的な学びの場面を設定することで、学びを進め深めていくことができた。
- 理由を説明する問題を練習問題として出題したが、多くの児童が学習したことを生かして問題を解くことができていた。普段の授業で理由を説明する活動を続けてきたことで児童が抵抗なく取り組むことができた。
- 個人思考の段階で自分の考えがもてず対話の場面で交流が成立しないことがあった。対話を有効にしていくために、机間指導や個別指導を充実させて一人一人の考えをもたせたり、問題解決につながる見通しをもたせたりしておくことが必要である。

【児童の授業評価アンケート結果（自由記述の抜粋） 6年2組 34名】

できるようになったことやより深く分かったこと	<ul style="list-style-type: none"> ・表に書いてみると分かることに気付いた。 ・変わり方のきまりを使って早く解けた。 ・最初の問題のやり方を使って次の問題を解くことができた。 	25名(73%)の児童がいずれかの意見を挙げていた。
学びを振り返って、自分でよかったと思うこと	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の意見を聞いて解けるようになった。 ・話し合うことで自分の意見が書けた。 	20名(58%)の児童がこれらの意見を挙げていた。

(5) 評価問題実施による授業改善と児童の変容

ア 授業改善の取組

検証授業以外の普段の授業の中でも評価問題を意識した授業改善の取組を実践してきた。特に、評価問題Ⅰで課題になったことについては重点的なポイントとして実践した。

国語科においては、課題に対して自分なりの考えをもつこと、自分の考えを話し合いの中で発表し合うこと、話し合いを受けて自分の考えを再構成することなどを学習活動として取り入れて実践した。特に、読み取ったことや自分の考えをある程度の量で書き表すことを継続して取り組んできた。

算数科においては、既習事項を想起すること、自分の考えを話し合いの中で発表し合いお互いの考えを理解し合うこと、学習したことを生かして問題を解決することなどを継続して取り組んできた。特に、話し合いの中で考えを交流しながらよりよい考え方を見付けていく活動や考えを説明し合ったりする活動をより多く実践し積み重ねてきた。

【話し合い活動の実践】



イ 評価問題実施による児童の変容

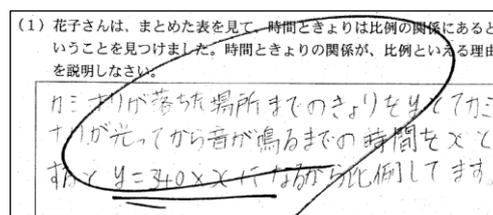
授業改善の取組と検証授業の実施の後に、研究所で作成した評価問題を実施し児童の解答を分析した。これにより授業改善の成果や児童の変容を考察した。

(ア) 国語科

- 評価問題ⅠからⅡと実施するなかで無解答が減ってきている。また、設問の条件を満たした解答が増えている。
- 理由を説明する問題において、叙述に即して根拠を示したり、他者の意見につなげて説明したりすることができる児童が増えてきている。普段の授業で、ノートに自分の考えの説明を書いたり、対話で考えを説明したりする活動を多く取り入れてきたことの成果がうかがえる。

(イ) 算数科

- 評価問題ⅠからⅡ、Ⅲと実施するなかで無解答が減ってきている。児童の問題に取り組む姿勢がよくなってきており、意欲が高まってきている。
- 理由を説明する問題などにおいて、数学



【算数の評価問題の児童の解答例】

的な用語を用いて説明したり、筋道を立てて説明したりすることができる児童が増えてきている。普段の授業で、ノートに自分の考えの説明を書いたり、対話で考えを説明したりする活動を多く取り入れてきたことの成果がうかがえる。

VII 研究の成果と今後の課題

1 kushima 版アクティブ・ラーニングについて

- kushima 版アクティブ・ラーニングを「主体的・対話的で深い学び」と定義し、3つの学びの姿を明確にした。「kushima 版アクティブ・ラーニングのススメ」の活用や指導案に3つの学びを明記したことにより、授業における3つの学びが児童生徒の学習の姿として具体的にイメージしやすくなり、授業改善の視点としても分かりやすくなった。
- 主体的な学びの姿として、児童生徒が問題解決の見通しや終末までの学習活動の見通しをもって学習に取り組むことができるようになった。また、児童生徒の粘り強く学習に取り組む姿勢も高まってきた。
- 対話的な学びの姿として、ペアや全体で話し合いを行う際、自分の考えをしっかりと伝えたり、友達の考えをきちんと聞いたり、お互いの考えの違いに気付いたりすることができるようになった。様々な対話の学習の積み上げや進め方の指導が効果を上げてきた。
- kushima 版アクティブ・ラーニングを進める土台として、ラーニング・スキルの指導は大変重要であった。話す、聞く、書く、読むなどラーニング・スキルを明確にして、意識的に継続的に指導してきたことは、kushima 版アクティブ・ラーニングの成立に大いに効果があった。
- 深い学びの姿について、検証授業で明確になってきたが、一人一人の学びのレベルなのか、本時の目標に沿ったものなのかなど曖昧な部分もあった。深い学びについては、教科における深い学びや単元における深い学びの姿などにさらに明確にして授業を進めていく必要がある。また、教師が児童生徒の深い学びの状況をどのようにみとるかということも課題として挙げられる。

2 学力調査等の結果分析に基づいた学習活動を取り入れた授業づくり及び評価問題の実施について

- 小中学校双方の視点を取り入れて学力調査結果分析や問題作成を行ったことにより、教科等で今求められている学力や授業づくりのポイントが明確になった。そして、ポイントを生かした指導の流れが分かり、指導者の評価問題を意識した取組が授業改善の取組として継続的に行われた。
- 授業改善の取組により、児童に身に付けさせたい力を付けることができてきた。国語科において対話の後に自分の考えを書きまとめることや、算数科において解き方を説明することなどの面で向上が見られたことは授業づくりと授業実践の成果である。
- 研究を進める中で学力調査分析を基にした授業づくりと kushima 版アクティブ・ラーニングの授業づくりの関連が明らかになってきた。併せて、双方の授業が今求められている確かな学力を付けていく学習として有効であるということが見えてきた。
- 評価問題を意識した取組を継続していくことが授業改善につながる。学力調査等分析→授業改善計画→評価問題作成→授業改善の実施→評価問題の実施→結果分析というサイクルを継続的に進めていく必要がある。
- 今回の研究では小学校第6学年をモデルとして実施したが、他の単元や他の学年においてもこのような取組を進めていき、小中学校で系統性のある指導を進めていく必要がある。

【 研 究 同 人 】

所長	土肥 昭彦	(串間市教育長)		
事務局	野辺 幸治	(学校政策課長)	永井 敬雄	(教育指導監)
指導員	津奈木 考嗣	(指導主事)		
研究員	多良 久	(北方小学校教頭)	音山 福太朗	(福島小学校教諭)
	川越 雅彦	(有明小学校教諭)	瀬戸山 なつ代	(大東小学校教諭)
	上村 直輝	(大平小学校教諭)	図師 啓悟	(都井小学校教諭)
	富永 直樹	(串間中学校教諭)	清田 しのぶ	(串間中学校教諭)
	尾崎 城夫	(串間中学校教諭)		